

新指定文化財展  
ど う わ ん  
平安時代の銅碗

会期 令和7(2024)年1月25日(土)～3月2日(日)

新指定文化財 氷川前遺跡出土銅碗について

口径18.9cm、器高4.8cmの大ぶりの銅碗です。一部だけ欠損していましたが、ほぼ完全な形で見つかりました(保存処理で欠損部を埋めました)。台が付かない、平底に近い丸底で、厚さ1mmです。

平安時代の銅碗がこれほど完全に近い形で見つかったのは県内で初めてです。歴史的な価値が高いとして、令和6年(2024)に富士見市指定有形文化財に指定されました。

銅碗とは

銅碗とは、銅を主成分とする合金で作られた、碗状の容器です。仏の供養に用いられたほか、食器としても用いられました。鑄造で成形し、研磨して仕上げたと考えられています。

日本では、古墳時代後期(6世紀)に朝鮮半島から伝わり、前方後円墳などの副葬品として残されました。飛鳥時代(7世紀)になると、畿内地方では最上位の食器となり、それをまねした土器も作られるようになりました。形だけでなく、金属光沢を線状の磨き(暗文<sup>あんもん</sup>)で表現するのが特徴です。このような土器は地方でも作られ、関東地方では上野(群馬県)で最も盛んに作られました。

奈良時代～平安時代前半(8～10世紀)には、竪穴住居跡からも見つかるようになりますが、非常にまれです。埼玉県内では奈良・平安時代の住居跡が1万軒以上調査されていますが、銅碗の発見が報告されたのは10点に届きません。金属はリサイクルされたという側面もありますが、相当貴重な品だったことは間違いありません。



氷川前遺跡の銅碗

## ひかわまえ 氷川前遺跡について

水子貝塚の西側の台地一帯を氷川前遺跡と呼び、さまざまな時代の遺跡が重なっています。

奈良～平安時代の集落跡は、これまでに<sup>たてあな</sup>竪穴住居跡が約 50 軒調査され、奈良時代は西部地区に 1 軒のみです。平安時代も西部地区を中心にし、9 世紀後半の住居跡が最も多いようです。10 世紀には分布が東に広がっていき、水子貝塚と東前遺跡西部にも住居跡の分布が広がっています。

台地西側の緩斜面にあった第 12 地点では、<sup>ほったてぼしら</sup>掘立柱建物跡が多く残され、また、大形の<sup>かじ</sup>竪穴住居跡（鍛冶工房跡）がありました。この住居跡

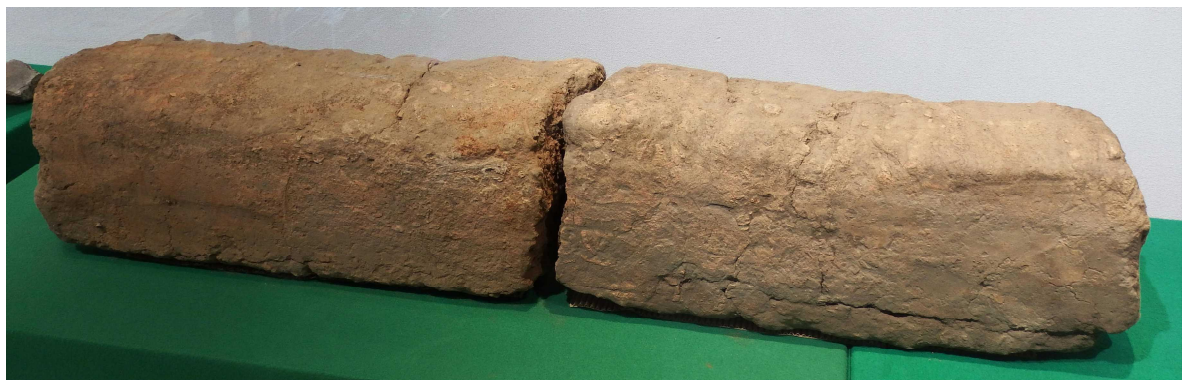
からは、カマドの構築に利用したと思われる<sup>きりいし</sup>切石も出土しました。多摩地区南部に多い、硬いローム層（シルト質<sup>ぎょうかいがん</sup>凝灰岩）から切り出した石材です。

さらに「得子」という文字が<sup>ぼくしよ</sup>墨書された土器が集中し、谷を挟んで対岸の松山遺跡では同じ墨書を持つ<sup>ぞうこつき</sup>蔵骨器が見つっています。

第 12 地点に隣接する第 57 地点でも掘立柱建物跡が発見され、焼成前に「<sup>うまや</sup>厩」と刻んだ刻書土器も発見されました。この集落に相当な有力者がいた可能性があります。



氷川前遺跡全体図



火を受けた凝灰岩切石（長さ 99 センチ）

## 銅鏡が出土した地点と住居跡について

今回銅鏡が見つかった第 95 地点は、遺跡の南部、水子貝塚のすぐ近くにあります。

平安時代の住居跡は、地点内に 1 軒だけです。その 52 号住居跡は 3.0 × 2.5 m の長方形で、小振りなサイズです。

銅鏡は、カマドのすぐ前に、口を上に向けて置かれたような状態で出土しました。

この住居跡からは、須恵器の坏や甕などが出土

しました。台付堦には「本」の字が底部内外面に墨書されています。これらは胎土や色調から、新開遺跡（三芳町）など、この付近の在地窯の製品のようです。住居跡の年代は 10 世紀後半～ 11 世紀初頭と考えられ、この集落跡の最終段階です。

銅鏡は、代々伝えられた可能性も有り、製作年代はそれ以前としかいえません。

なぜ、貴重な銅鏡を残していったかは不明ですが、集落の終焉と関係があるかもしれません。



調査状況



平安時代の竪穴住居跡調査状況



形状を保ったまま出土した銅鏡



平安時代竪穴住居跡のカマド前で出土した銅鏡

氷川前遺跡第 95 地点の調査



銅鏡と同じ住居跡の出土土器



墨書「本」

## 銅鏡の成分からわかること

成分(元素の比率)を分析すると、銅約82%、鉛<sup>なまり</sup>約7%、砒素<sup>ひそ</sup>約5%、錫<sup>すず</sup>約4%でした(検出総量に対する割合)。砒素を含む青銅です。材料に砒素を含んでいると、溶ける温度が低くなって、流れやすくなり、鑄造に向いているといえます。

また、産地によって比率が異なる「鉛同位体比」を調べたところ、山口県～福岡県の鉱山から産出する鉛の特徴を示しました。その地域で古代に開発された鉱山としては長<sup>ながのぼり</sup>登<sup>みとうちよう</sup>鉱山(山口県美東町。秋吉台隣接地)が有名で、ここから産出した銅は奈良の大仏や、皇朝十二銭にも使われました。そして、ここからとれる銅原料には、砒素を含んでおり、わざわざ添加する必要がありません。

古墳時代の銅鏡はおおむね朝鮮半島産の鉛が使われており、製品自体が輸入とも考えられています。飛鳥時代に国内の鉱山が開発され、製品の一部も国産になったと考えられています。そして奈良・平安時代には国産が主になったと考えられています。

以上から、氷川前遺跡の銅鏡も奈良時代以降に国内で製作されたと思われます。

ちなみに「高麗郡」に属していた飯能市張<sup>はりま</sup>摩久保遺跡では3点の銅鏡破片が見つかりましたが、すべて朝鮮半島系の素材でした(1点は中国の可能性も有ります)。3片それぞれ年代が異なる住居跡から出土しましたが、銅鏡の製造入手時期は定かではありません。

富士見市内の宮脇遺跡では平安時代(9世紀)の鑄造工房跡が見つかっています。密教(天台宗や真言宗)で使われる柄香炉<sup>えごうろ</sup>や塔形鏡<sup>まり</sup>の鑄型が見つかっています。ふじみ野市東台遺跡と三芳町俣<sup>またの</sup>埜遺跡では製鉄炉跡や鉄釜の鑄型も見つかっています。古代のこの地域には金属の生産・加工に関する遺跡が集中しています。氷川前遺跡の銅鏡も、もしかしたら、この地域で生産されたものかもしれません。

## 参考文献

- 齋藤努;中井歩 2019「埼玉県内出土銅鏡の鉛同位体比分析について」埼玉県立史跡の博物館紀要(12), 63-78  
澤田秀実;齋藤努;長柄毅一;持田大輔 2019.01「中国四国地方で出土した銅鏡からみた国産銅鉛原材料の産出地と使用開始時期」国立歴史民俗博物館研究報告(213), 31-41



宮脇遺跡の鑄型と塔形鏡復元例